歩くA

ただひたすらにまっすぐな一本の線があった。
それは道と思しき存在であった。
そこには前にも後ろにも途方もなく道が続いていた。道だけが続いてた。

気が付くと、Aはその道に立っていた。
その道に両足を降ろすまでの経緯など最初から無いに等しく、道にAが立っている、それだけが確かな事実であった。
Aは歩くことにした。ひたすら歩いた。
何故、Aは歩いているのか。歩く他に方法を知らなかったのだ。
もしくは、道は歩くものであるというAの固定概念に起因する動機から歩いていたのかもしれない。
とにかく、Aは歩き続けた。

歩いている途中、Aは足に怪我を負った。
それでも休まず歩き続けるものだから怪我は治るどころか悪化して血が流れ出した。
ともすると歩くのが困難になるほどであった。
何故、怪我を治そうとしなかったのか。歩く他に方法を知らなかったのだ。

Aとバス

しばらく歩き続けると、ベンチがひとつ道の端に佇んでいた。
ベンチを見つけたAは座ることにした。
どうやらそこはバス停のベンチであったようで、後からきた別の人間がAの横に座り、ベンチが人で埋まるとベンチを先頭に人の列が出来上がっていった。
ほどなくしてAの前でバスが止まり扉が開いた。
Aはどうすれば良いか分からず立ち尽くしていたが、後ろに並んでいる人々に半ば背中を押される形でバスに乗り込むことになった。
バスに乗ったAは歩くことよりも格段に速くそして短時間で遠くに移動可能であるバスの存在に驚いた。そして何より疲労しないことが快適でありその快適さにもAは驚き感激した。
Aを乗せてバスは走り続けた。
しばらくすると、Aの周りの人々が怪訝な顔をしてしてAを見つめ始めた。
何事かと辺りを見渡すとAの足元周辺が血の海になっていた。
怪我をした足から血が流れ出ていてバスの床を赤く染めていたのだ。
血で靴が汚れる、怪我の具合が見るに耐えない、などの様々な理由でAはバスを降りなければならなくなった。

Aを降ろしたバスは再び走り出し、残されたAは暫くぼんやりしてから再び歩き出しだ。

Aとバイク

血だらけの足を引き摺りながら歩いていると、バイクがAの傍で停止した。
バイクから降りてきた人間はAの怪我の状態を見てそのままでは歩けないだろうと、Aの傷の手当てを施した。
Aは怪我の痛みが幾分か和らいだことに驚き感謝した。
バイク乗りは急いでいたのであろうか、Aの怪我の手当てを施すや否やAのことは気もそぞろにバイクに乗って走り去ってしまった。
そのとき、不幸にもタイヤが怪我をしたAの足を轢いて走り去ってしまったのだ。
Aの足の怪我は一層酷くなってしまった。
残されたAは暫くぼんやりしてから再び歩き始めた。

しかし、どうにも怪我の痛みが激しく遂にAは道に座り込んでしまった。

しばらくすると、Aの様子を心配してだろうか、Aに声を掛ける人間が現れた。
Aは、怪我の痛みが激しくて歩けないので手当てをする方法はないだろうかと問うと、それならばAを背負って歩くと言う。
その人物は、Aを背負って歩くのには到底無理のある体躯なのだが、背負って歩くと主張して聞かなかった。
Aはその人の主張に従ったのだが、背負うというよりそれは殆ど引き摺られる形に近いものであった。
引き摺られた所為で傷が悪化し、余りの痛みに耐えかねて、Aは足の痛みが酷くなってしまったので他の方法はないだろうかと提案すると、相手は、自分の努力と思いやりを台無しにされたとひどく憤慨して、Aを置き去りに何処かへ行ってしまった。
Aは随分の間、ぼんやりしていた。
そしてゆっくりと自分の足の怪我と向き合った。
片足はもはや足という原形を留めていなかった。

怪我をしたのは不幸だったな、と呟くと、Aは足を引っこ抜きそして再び歩き始めた。
その状態が「歩く」と表現するに相応しいかは分からないが、とにかく歩き始めたのだった。

「度重なる悲運も然ることながら、怪我をしてからのA自身に主体性が著しく欠如していたところにAの不幸は存在したのだ。」

そんな話をしている人物がいた。
その人物には片足が無かった。
しかしながら、その人物が話の中のAであるかどうかは定かではない。

＜完＞